

Title	東北大学医学部泌尿器科生殖器研究班の進展(随想)
Author(s)	宍戸, 仙太郎
Citation	泌尿器科紀要 (1974), 20(8)
Issue Date	1974-08
URL	http://hdl.handle.net/2433/121702
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

随 想

東北大学医学部泌尿器科生殖器研究班の進展

宍 戸 仙 太 郎*

現代ほど性知識が氾濫している時代はかつてなかった。これだけ性の問題が、はでに取扱われているにもかかわらず、この問題と真剣に取り組む学問として研究し、体系づけていこうとする研究者はきわめて少ない。その原因はいろいろ考えられようが、なんといっても研究体制づくりが他の学問とは比較にならないぐらい遅れてしまったからであろう。性に関する先進国である欧米でさえ生殖器を専門に研究する講座が独立している大学は数えるぐらいしかなく、ましてやわが国においてはここ当分講座が独立する可能性はないであろう。とすれば泌尿器科がこれら性の問題の研究の大半を負擔せねばなるまい。このような考えに基づいて私は泌尿器科学講座開設と同時に性に関する問題を取扱う研究班を設置したのである。

まず班の構成メンバーの人選より私の仕事は始まった。というのは研究内容が内容であるので性格のまじめな品行方正な者でなければならなかったからである。これら条件にぴったりの人として入沢俊氏君（現入沢病院副院長）と白井将文君を選んだのである。

さて研究の内容であるが、きわめて広範囲におよんでいるのでそのすべてをここ紹介することはできないので、これらの研究のいくつかについて、そのアウトラインだけを述べることにしよう。

まず男性インポテンスに関する研究がある。この性機能障害の研究に先だち、日本人の、しかも正常人の性生活の状態をどうしても知っておく必要があった。そこでわれわれは大がかりな性生活調査をおこない、従来信じられてきた日本人は欧米人より性交回数が少ないとか、肉体労働者のほうが知的労働者より性交回数が多いという説を完全にくつがえしたのである。さて私の研究が臨床神経学である関係上、生殖器の神経支配、とくにこれら支配神経が障害された場合どのような変化が起こるかという問題より研究がスタートしたのはごく自然のなりゆきであった。これはやがて直腸癌や子宮癌手術後にどうして性機能障害が起るのかという研究に発展し、大腸肛門学会総会での特別講演と

なり、さらには泌尿器科学会総会の宿題報告へと発展してゆくのである。

ところで最近労働災害の増加や交通事故の激増に伴い勃起神経を損傷する例も増加し、その補償をめぐってトラブルがたえない。というのはこれまで器質的インポテンスと機能的インポテンスを客観的に鑑別する方法がなかったためである。そこでわれわれはisotopeを利用して陰茎内の血流の変化を測定するradioisotope penogramを開発しpenogram曲線の違いより両者の客観的な鑑別が可能となった。この方法で器質的インポテンスと診断された者に対してわれわれは各種のsilicone prosthesisを開発し陰茎内に挿入する手術をおこなっており、これら一連の研究は世界各国で反響を呼び性の最先進国であるスウェーデンで白井君が講演をするまでに発展をとげたのである。

次にsex controlに関する研究について述べると、sex controlは人類の一つの夢であり、これまで多くの研究がある。われわれはヒト精液を用いて今まで想像もつかなかったようなきわめて弱い電流を流すことによりX精子とY精子を分離できるようになった。

次に精子の移送に関する研究も興味ぶかい。われわれは睾丸の白膜が収縮することを明らかにし、このさいの睾丸内圧の上昇を世界ではじめて記録することに成功した。これら白膜の収縮に伴う睾丸内圧の上昇が運動性を持たない睾丸内の精子の移送に大きな役割を演じていることはほぼまちがいない。

また精管より先の精子の移送、とくに射精の研究は木村行雄君を中心に精力的におこなわれており射精現象と末梢神経との関係はほぼ解明され、これら基礎的研究は実際に射精障害患者に応用され良好な治療成績を挙げている。

以上われわれのおこなってきた研究の一端をご紹介するにとどまったが、私の夢は性器科学を学問として体系づけてゆき、今後も性で悩める人たちのよきコンサルタントでありたいということである。

* 東北大学医学部教授（泌尿器科学）